

報



會

會 岳 山 本 日

106

月 六 年 六 十 和 昭

非爐邊談話

沼井鐵太郎

炭の配給が悪いからこんな標題にした譯といふのではない。元より會長ではなし、であつても本會は政治的の獨裁權を振ふボスの機關でもなし、勿論三選の世を謳歌する事でもなし、といった輕口で非の字を冠した次第。具體的にいへば、どうした風の吹き廻しか、虎ノ門の會合に再々顔を曝すやうになつた中古會員の淡々たる辯である。

先づ編輯幹事命じて「本年度の事業」或ひは「日本山岳會賞」に就いて愚生に何か書けといふ。驚いたもので、此の間會報に何か書きませうとは答へて置いたものゝ會務に關して書かねばならないとはついぞ知らなんだ。未發表の事ながら、會務に今度正式に有給の事務擔當者として主事といふ職員を置いて、旁々主事は會の代辯者としやうといふ案がある。社團法人となつて色々機構の改革やら業務の刷新やらしなければならぬ。其の成形の一つの案といふのであつて、愚生も及ばず乍ら定款細則の思案検討に頭を悩ましてゐる者の一人だが、研究中の事項は公人の立場で一寸言ふ譯に行かな

い。よし言つても代辯者に頼んで言つてもらふか、會長又は理事が聲明するのが最も當を得てゐると思ふ。只一會員としての發言權は、折角「會員の聲」欄も特設された事だから、充分に行使し得るのである。

偕て其處で例の「日本山岳會賞」の件だが、此は本會の處務規程第何條かに「本會ハ山岳ノ研究・研究的登山等登山界ニ寄與大ナリシモノニ對シ『日本山岳會賞』ヲ交付スルコトアルヘシ、本賞交付ノ方法ニ關シテハ其ノ都度役員總會ニ於テ之ヲ定ム」として置きたい。勿論未だ私案に過ぎないのだが、要は本邦登山界の標準を揚げ本會の研究的指導精神を發揮するにあるので、より善きより大なる山岳貢獻の獎勵策の一として行きたいと思ふ。其の意味で本會々員は勿論優先的に選ばれるべきであるが、廣く本邦一般にも優れたる登山探險の實踐的業績又は科學的其の他の研究調査記録があれば、其れ等皆授賞審議にかけたいと思ふ。只、此の賞が毎年一回一人又は一團體のものか、年を決めずに本統に優秀なものに交付するかは未定であるが、愚見を以てすれば若し獎勵に重きを置くらば毎年やつていゝものと思ふ。たとへば假に或る年ヒマラヤの七千米級以上に

初登した組の報告が「山岳」に掲載されて賞をもらふ。次の年は海外遠征こそ無かつたが、國內未踏のヴァリエーション・クライムを幾つか連續して完成した學校山岳部があつて授賞の榮譽が輝く。又次の年は登山の實踐は記録的には非常に低調であつたが、遠征登山の裝備に關し理論研究並に國內山岳での實驗調査の精細眞摯な報告があつたので選に入つた。又次の年は特定地域の登山史的地誌的著述の努力と研究に對して授賞と定めた。又次の年は外地の登山業績も相當なものであつたが、夫よりも雪洞の科學的研究と技術の公開が是認されて其の方面の研究者群が入賞した。或ひは又、登山大衆の指導に預つて力あつた仁俠的山小屋經營者が賞される年があつてもいい。要するに其の年に唯一つの日本山岳會賞を選ぶといつた方が面白いし、又勵みになる事と考へられる。

今迄言ひ忘れてゐたが、日本山岳會賞は本賞の外に副賞として獎勵金を添える事は勿論である。獎勵金は特別會計を活用して、業績相當の金額を出してもらひたいと思つてゐる。何も未だ具體的に決つた方法はないのであるから、會員諸氏を通じて百萬人の名論卓説を伺ひたいと存する。

目次

- ・ 非爐邊談話……………
- ・ 清澄の裏山路……………
- ・ ウェストンを憶ふ……………
- ・ 續山スキー……………
- ・ 山の名、山の地名(五)……………
- ・ 事務所便り……………
- ・ 圖書紹介・會員通信……………
- ・ 會員の聲・會務報告……………
- ◇ 昭和十六年度豫算……………

統に完結し斯界の信頼をか得たものが、出版事業以外果して幾何ありや。出版事業關係にしても昨年来懸案の登山年譜(日本登山史)作製などどれ丈の實行可能性があるであらうか。愚圖々々してゐると社團法人設立記念などと大それた事は申上げられなくなる。取越

苦勞かも知れないが、愚生の一臺灣登山史編纂でも相當の年月調査を要した。其れも編輯者に義理立ての餘り疎漏たるを免れず、其の御詫びに迄「補遺・正誤・索引」を仕上げるべく目下苦心の體たらくである。

全日本の登山年譜といへば、正に並大抵の仕事ではない。故に計畫は先づ社団法人設立の今年を基準とし、今年までやれる年譜資料の蒐録検討整理分類と既往分の夫れとに分けて、今年分は必ず來年三四月頃には纏め上げてもらひたいものだ。之に就て第一にする仕事は登山文獻記録の蒐集である。

其の爲に便利な豫備行動はせめて會の圖書室に來る圖書・諸雜誌類のカードに依る記事抄録、出來れば之も會報に或ひは會報附屬の雜印刷物として會員中希望者に實費を以て頒布してもらいたいものだ。一體山岳文獻の記事抄録及紹介さへ本會で完全公正にやれば其れ丈さへ眞面目な研究的會員の數も増加すると思ふ。地方にある會員の爲にも、反日本山岳會輿論者流の覺醒の爲にも、岳聯をリードする仕方の一つとしても、比較的少しの努力で繼續出来る仕事のつだと思ふ。

非爐邊談話だから今は演説の時のやうに想を練つてしやべつてゐるのではない。従つて愚生の愚説といふに批評は盡きるかも知れない。其れであつてもいい。然し山と會を熱愛する者にとつてゆるがせに出来ない事は、日本の山行が行きつまつたといふ事と日本山岳會は更生せずして沈滞してゐると自罵惡評の有り得る點である。之を是正し善きに發展せしめる方策の一つに日本山岳會賞の制定があり、又有言實行を幹部諸氏に強い

るのである。附言して曰く、一體我々は實行必至といふ事と試験研究時代といふ事とをどつちやにしてあせり過ぎては居ないだらうか。岳聯の問題にしても其の精神結合は論する迄もなし、但し方法論的には未だ枝葉末節を決められぬ試験時代である。

はなからうかといふのである。會の一般の仕事にしても、いやくも社團法人となつた責任に於て、たとへば山小屋や山岳避難救助機關案の如き幾つかの未決事項は一應應を付けて中止、繼續、研究中の態度を判然とすべきものゝやうに思ふ。そして又若し中年者の神經病みを率直に表現する事を許してもらへるならば、我々役員は單なる名みの役であつてはならない。定款細則の一つに德義的方面を強調して、「役員ハ會員中ヨリ選舉又ハ推舉セラレタルモノナレバ恒ニ法人タル本會ノ代表公務者タルコトヲ自責シ、其ノ言動ヲ慎重ト共ニ進ンデ會務ニ精勵セント努ムベシ」とでも入れたいと思ふ次第である。

清澄の裏山路

行方 沼東

清澄は房總一番の山である。高さ僅かに三三三米に過ぎないが、多くの山岳を周圍に持つてゐるので、その間を歩くことは仲々興味の深いものがある。第一に山を歩いてゐても、滅多に人に會はないから山の氣分を害ふことはない。

第二に相當の樹林の古いものが残つてゐるので、低い割に山深く來

たといふ喜びも得られる。又その樹林の中には澤山の小鳥が、棲息してゐるのでよい啼聲を樂しむことも出来る。第三に植物の種類が非常に豊富で、殊に羊齒類の生態美に接しやうと思ふ人には忘れてはならぬ所だといへる。

以上の諸點を満して哭るのは、清澄山でも特にその裏山歩きであ

る。

そこは何れも小櫃川養老川の水

源をなし主として國有林と帝大演習林である故、林道、里道は四方に通じ思ふ儘に歩くことが出来る。澤に下れば拘すべき清流があり、林下を行けば楚々たる羊齒類の群落を見る。低山のうちの低山ではあるが、味到して失望しない。龜山線の龜山驛と、小湊鐵道線の朝生原驛と、房總線の天津驛とを起點として、中央に清澄山を置きこれらを南北に結びつけると、左の山路が出来る。

(イ) 龜山驛—三石山—清澄山—天津驛
(ロ) 龜山驛—黃和山—石尊山—朝生原驛
(ハ) 龜山驛—折木澤—郷臺烟—清澄山
(ニ) 朝生原驛—小田代—會所—麻綿原—清澄山
(ホ) 朝生原—太田代—横瀬—清澄山

(イ) は、ハイキングコースとしてよく知られてゐるが尾根通しばかり行くので物足りない。國境から先清澄までは平凡で變化に乏しい。(ロ)も主に尾根を行くが、樺梅の林相がよく、路の變化があつて山が深い。(ハ)これは澤歩きで郷臺烟から先國境に出て三石路と

一緒になる。(ニ)は養老川に沿つて水源へ辿るもので、橋と澤を渡ることが多く、靜かな溪流の美しさを堪能出来る。(ホ)一番距離は短い尾根の路。この外清澄から小櫃川に沿つて四方木、黃和山を経て龜山驛への立派な縣道がある。

この路では、紅葉で名の知れた白岩橋附近と、ヒカゲツツジが崖一杯に咲く石尊山の兩側の風景とがよい。以上のどの路を歩いて、心ゆくたかに鳥聲を聞き、草木を探りながらの至極輕い一日の山旅である。(陸測五萬「大多喜」鴨川参照)。

谷川岳避難小屋報告

前々號に中間報告をいたしました谷川岳避難小屋の其の後の建設状況を簡単に御知らせします。

- 一、小屋組立 五月二十日沼田町に於て行ふ。
- 二、材料運搬 五月二十六日—六月二十日
- 三、經路 西黒澤—熊穴澤—天神尾根
- 四、組立 六月二十五日—六月三十日
- 五、土木工事 六月二十一日—七月五日

(角田記)

ウエストンを憶ふ

(一八六一—一九四〇年)

T・A・ラムボルド

吉阪隆正 譯

日本アルプスの父、ウォルター・ウエストン師逝いて早や一年、今更に光陰の速きを感じる。本會としても前山岳編輯者藤島敏男氏は、「山岳」誌上にウエストン師の追悼文を掲載することに多大の盡力をされたが、不幸未だ實現されざるを遺憾とするが、冀は出来るだけ早く同師と面識のあつた會員諸氏よりの御寄稿を望む次第である。爰に吉阪君を煩して譯出したのは最近の A・J (一九四〇年十一月) 所収の追悼文で、参考となる點が尠くないと思ふ。尙「山岳」二十八年第三號所収の黒田孝雄氏「ウエストン氏の杖の跡」もこの際讀みかへされてもいゝものであることを附言する。(編者)



ウォルター・ウエストン (Walter Weston) 氏はダアビーのマイル・アッシュ・ハウスのジョン・ウエストンの子として、一八六一年のクリスマスの日に生まれた。ダアビーの學校に學び、終生ダアビー州の人として、その地方その出身校や、又妻を通じてフィッツハーパーツ (Fitzherberts) なるダアビーの古い家系の一つに結ばれてゐたが、彼は強くそれ等の福祉を望んで止まなかつた。學校を了えて、劍橋のクレア・カレッジに赴き (一八八三年文學士となる)、一八八五年には聖職を得て、セント・ジョンの讀會の牧師補となつた。

瑞西への第一回旅行記録は、一八八六年で、

その折にツェルマットからマッターホルンに登つてゐる。一八八七年再び渡り、ベルニーズ・オーバーランドに初めて接してゐる。この年に、ヴェッターホルン、アイガーを攀ち、今一度マッターホルンに登り、トリフトヨッホを越えてゐる。

一八八八年(明治二十一年)、恐らく彼は生涯の内で最も重大な果斷を行つたのであつて、傳道教會牧師會 (C.M.S.) から日本へ宣教師として渡つたのである。一八八九年には神戸の英國教會牧師となり、一八九四年まで留任してゐたが、思ひ通りの國に來た事を喜び自らも「八分の七は山である」と述べてゐる。

一八九〇年にはウエストン氏第一回の富士登山を行ひ、次いで一八九一年には H・W・ベルチャー氏と淺間山、御嶽、駒ヶ岳(木曾)等の火山に登つてゐる。一八九二年には初めて乗鞍岳の西面を攀ち、槍ヶ岳の第三回登頂、そして歐人による赤石山の初登頂をなしてゐる。笠岳の計畫は土地の人の反對で中止された。翌一八九三年の初めに舊交の E・F・タケット氏の推薦により又日本で知り合つたダグラス・フレッシュフィイルド氏の支持によつて英國山岳會員となつた。

一八九三年から九四年にかけて、ウエストン氏は活潑に登攀を行つてゐて、毎年の慣しの様になつた富士登山の他、惠那山に登り、針の木峠を越えて立山に、穂高岳に、大連華山(白馬嶽)に登つてゐる。笠岳も再び拒まれた後、終に登り、又常念岳、御嶽をも訪れ、後者では頂で一夜を明してゐる。之等の旅行の結果は王立地學協會で「日本アルプスの探險」なる報告となり、英國山岳會では「日本アルプスに於ける登山並びに傳説」として講演された。(A. J. 17493 頁以下)

それから暫く舞臺が變つて、一年間倫敦港の船員の傳道の爲に副牧師となり、一八九七年にはウィンブルドン・クリスト教會を預つて牧師補となつた。こゝでは自由な、責任ある牧師の地位や、又當時のウィンブルドンの人達の教養と厚遇を大いに活用して、幸福な五ヶ年を過した。休暇は勿論アルプスで過され、七月頃になると好きなベルニーズ・オーバーランドに出かけては主要な峯を全部登り盡した。僅に彼の手を逃れたのはシュレックホルン唯一峯である。

この内で一番有名な登攀は、恐らく一八九七年、H・S・バロック氏と、他に無能な羚羊狩人を伴つて雷雨の中をアイガーヨッホ越えをした時であらう。グリンデルワルド・フィッシャー氷河源頭の水壁を下つて、バーレック小屋にいたのは午前一時であつた (A. J. 18071 頁以下)。その他の登攀としては一八九八年に H・S・バロック氏及び H・J・ハード氏と共に新ルートをとつてアレッチホルンの縦走、一八九九年に H・S・バロック氏及び T・G・ロングスタフ氏とヴェンデルンアルプからメンヒを攀じて、優秀な氷雪技術を見せたものや、一九〇二年ユンゲフラウヨッホを越え、又 H・S・バロック氏とシュマドリヨッホに、F・W・ボイルストン氏と東北稜からミッテルホルンへ登つたのなどが擧げられる。

一九〇二年にウィンブルドン・フランシス・フォックス卿の令嬢フランセス・フォックス嬢との婚約成り、カナダ、ロッキーを通つて日本への旅が當然それに續いた。それも夫人が女子山岳會の優秀な會員であつて、全く夫の希望する所に從つて行つたので、二人して日本アルプスを踏査し、今度は甲州方面に足を伸した。一九〇三年から五年の間に、鳳凰山の初登攀を而も最後の部分は單獨で登り、日本第二の高峯、甲斐ヶ根(北岳)や、夫人と伴に劍ヶ峯を又妙義(岳)を登つてゐる。又夫

人同伴では八ヶ岳を横断し、第六回目の富士登山にも連立つて、歐洲婦人として富士の初登攀をなしてゐる。そしてこの時は「未知の世界を強く知らうとする」探險家の慾求から、彼は火口内に網を用ひて五五〇呎も下つてゐる。

一九〇五年ウェストン氏は再び歸郷して數年間イウエルの牧師を勤めた。然し一九一一年、日本への憧れは再び堪え難い程強くなり、福音宣布協會の下に四年間横濱の牧師となつて來り、機會ある毎に山に登つた。この頃漸く日本に於ても彼が奨励した登山が相當に認められて來てゐた。日本の登山の祖は空海であると彼も述べてゐるが、現代の先覺者は何といつても、ウォルター・ウェストン氏であり、日本山岳會も氏によつて創設される様になつたのである。

乃ちその業績に對して日本山岳會は氏を最初の名譽會員に選んだのであつて、この榮譽に氏は深く感激された。

英國に歸つて、ウェストン夫妻はケンシントンに落ちつき、氏は講演を續け、かつての船員の傳道にも關心を持ちつづけた。それからよくコーンウォールで過し、後年海岸を掘りかへしては、この地方の考古學的遺物や海鳥の研究にも進んで行つた。大戰後には再び

お氣に入りのオーバーランドを訪れ、オーバーシユタインベルグ、キンタールやガステルンタールの小さな宿に赴いてゐる。

一九一七年には王立地學協會からバック・グラントの賞を得、又一九一九年から二一年にかけて英國山岳會の委員として働かれた。ウェストン氏は又文をよくし、日本ではその著書のあるものを古典と見做してゐる程である。

Mountaineering and Exploration in the Japanese Alps, 1893 (邦譯あり); The Playground of the Far East, 1918; A Wayflaver in Unfamiliar Japan, 1925 等がそれだ。又一九二二年にモナコに開かれた山岳會議の爲の *Alpes Japonaises* がある。更に氏の文章はアルバイ・ン・ジャーナルやジェオグラフィカル・ジャーナルに多々載せられてゐる他に、英、米の新聞にもよく寄稿された。

數年前に夫人を失はれて、非常な打撃をうけられたが、一九三七年に日本の登山界で銅製の氏の額を、日本アルプスの景勝の地に建設した事と、勳四等瑞寶章の贈與の御沙汰があつたので、高齡の氏は大いに元氣を恢復された。氏の最後の瑞西行は、昨年(一九三九年)の夏で、戰爭勃發の爲一大決心をして歸國せられた時には既に

相當衰弱して居られた。

偶にウェストン氏に逢つたのは、氏が生涯を片目で過されたとは誰しも氣付かない。全く遠近の判斷力を持たれない氏が、如何にして山を登り、本を繙いて熟讀し研究されたか、又何處かハーディの筆を思はせる様な流暢な筆でものを書かれたかを述べる事は難しい。確かに、氏は不完全な視力を補ふ様な才能を與へられてゐたのである。氏の指が岩に對してねばり強かつた様に、氏の頭も、心も亦忍耐強かつた。併しその内にあつて決して吝嗇な所はなく、却つて、慈悲深く、自分のなし得る以上の事を別け與へるといふ風であつた。例へばヤコブ・マニ・ラウエナーといふ氏が特に目をつけられた山案内人の家族に對しては、頻繁に、そして相當な贈物をしてゐられる。又友人の一寸した技能に對しても、それを認めて育てるに吝でなかつた。氏の最大の缺點とも云ふべきは二分間とパイプを口から離す事の出来なかつたことであらう。

ウェストン氏はリーダーとしての資格を十分に備へて居られた。身體はやゝ小さい方だつたが、その頑丈さや、強い顔貌、そして一方が茶で他方が灰色だつた目には何か心を惹くものがあり、人を支配する力があつた。ネルソンの様に、時には盲の目に望遠鏡を持つて行く様な事もされた。その膽力は坐つたもので、ある時などは感違ひから、氷の斜面を雪と思つて、グリセードで下り下り様として、凹凸の多い斜面に倒れまいと努力したが空しく、頭からひどい轉び方をされた事があつた。それから家までは相當な努力を要したのに、ホテルの食卓につかれて、いつもの様に樂しうにユーモアを飛ばされたには驚いた。辛い時には又バレーなどよりも以上に強くキリスト教信者たる事を示された。日本での事實として氏の説教には説得されずにはゐられなかつたといふ事もある。これ等が氏に感動させる力を持たせ、これに話術の巧みさや、ユーモアと相俟つて氏の大學の科外講義や、ギルクリスト教育會での講師として人氣を拍したのであつた。

高山の花や、山の景をも深く愛された所に、氏の美を解される心が認められる。日本の凡てと同時に、ウェストン氏は日本の藝術を愛好された。そして版畫の外に夫妻で掛物を相當に蒐められ、英國山岳會へも富士山の一幅を寄贈された。

友情も亦深く、いつまでも變らぬものがあつた。人の氣を察する事速く、喜びを求め樂しまれた氏は非常に氣持のよい道連れでもあつた。ウェストン氏は、私にとつて、若い頃に山への指導をして下さつた方であり、氏と共に初めてのガイドレス登山をしたのもあつた。その登攀には何もなかつたが、又凡てを含んでゐたとも云へやう。高原や氷河の流れに長い暮

圖書室

開室時間

月水金 正午—午後八時
火木土 正午—午後五時

日曜、祭日、閉室

精々御來室の程希望いたします。

行程を辿り、豚小屋の様な所に一夜を明し、岩と氷と闘つてそれにうち勝ち、下山したのであつた。この様な事は七月毎に我々同士の多くが経験する事であるが、ウェストン氏なしにはあの時程雪を白く花を賑やかに、又野生の莓とミルクを甘くは感じなかつたであらう。



續山スキー

—三浦敬三著「雪質とクリ
スチャニヤ」を讀みて—

堀岡 清

前號で私の述べた事は、山スキー指導法の確立と言ふ事であつた。その原稿が未だ活字にならぬ中に、此の問題と眞向から取組んだ良書が出た。これが「雪質とクリスチャニヤ」である。

本書はシーズン・オフの四月出版といふ異色に相當する程、その内容も従来の教科書と異つてゐる。内容は二つの部分から成り、第一部は、萬能クリスチャニヤの稱あるステムクリスチャニヤの基本的説明であり、第二部は、山地に於けるその應用を述べたもので、全巻悉くステムクリスチャニヤに終始してゐるのである。

著者の持つ廻轉理論を要約すれば、上體は常にスキーより先に廻轉の方向に向けて捻られ、この捻りが足を追ひてスキーを廻轉させ

る力となるものであり(三三頁四一頁)、體重を掛けられた外足は力強く彈力的に廻轉をリードすべき事が強調せられ、前號に於ける獨佛二流に比較すれば、多分に獨逸的廻轉と見る事が出来るのである。本書の前半約百頁に亘つて、此のステムクリスチャニヤ——外足開き皆無の極點がライネクリスチャニヤであると言ふ意味に於て、ライネクリスチャニヤをも含めて——のあらゆる動作が分解詳述せられてゐるのであるが、茲では問題のある比較的重要な點のみにつき紹介して見よう。

半制動に就いて

半制動滑降に於て、體重を山足に置く事は疲勞が多く且制動力が弱いから、谷足の親指の附根に掛けるべきであると言ふ主張は、比較的緩傾斜として谷足の開きの小さい場合には有効である事を認めなければならぬけれども、急傾斜では事實上不可能であらうし、又谷足開きの大小に關係する問題であるから、著者の主張を一般的姿勢と見る事には尙疑問があるであらう。

平路と角付に就いて

スキーを廻轉させる爲には、平路が絶對的に有利であり、角付は逆に廻轉を困難ならしめる。従つて角付は廻轉に隨伴する横迂りを

防ぐ爲にのみ、それ丈の程度で行ふべきであり(四四頁)、角付の過大は、假令その程度が些少であつても轉倒の大きな原因となる(四五頁)と説き、高速度大廻轉の可能な雪質では多少の横迂りはあつてもこれを軽く見て平路に重點を置く(一八四—五頁)のであつて、角付の過度と言ふ事を極力いましてゐるのである。力學的に見て平路と角付の何れが廻轉に有利であるかは私の言ひ得る所ではないけれども、スキーが雪中に沈み込んでゐるといふ事を前提として考へるならば、角付そのものが廻轉を困難ならしめるとは考へ難いのであり、著者の強調する程角付の弊害を重視しなければならぬ場合の方が、寧ろ特殊の場合だと思はれるのである。但し此の場合角付と體の内傾、内足體重といふ事とは必然的關聯がないと言ふ事を忘れてはならない。

前傾に就いて

最近の新しい技術と昔の技術との相違は、前傾即ちスキーの旋回中心點を踵から足先に持つて來たと言ふ點であつた。本書に於ても此の點は違ひがないが、然し著者は不必要に過度な前傾の弊害を強調し、この矯正に意を用ひてゐる。著者に依ると、前傾の度合は足指の附根が重心の支點になる

(七一頁)程度が適正のものなのであつて、その點をはずしては前後何れになつても不安定は免れない。踵を浮き上げて、足先のみに加重する事はスキーの廻轉力を殺ぐのみならず、廻り過ぎを生じ不安定となり、前方に投げ出される虞が多い。それで原則としては、足先に加重し、踵にも意識的に力を入れる事が必要なのである(四七頁)。普通の山地では、此の前傾の過ぎた姿勢を取るならば僅のショックで前方に投げ出されるし、平均運動の最も安全さが要求せられてゐる廻轉中には同様單に前方に投げ出されるのみなのである(四八頁)と、練習場でよく見かける不必要な前傾——寧ろ前投と言ひ度い様な、そのくせ本當に必要な場合には後傾になると言ふ様な似非テムボオ技術の間違を正す爲に、繰り返し繰り返し適正前傾と言ふ事を強調してゐるのである。著者の言ふ適正前傾は理想の極點であるけれども、我々にとつて重要な事は如何にせば此の理想點に最も早く到達し得るか、どう説明すれば讀者に最も良くこれを會得せしめ得るかといふ點であり、著者の此の説明が一般練習者に對する最も効果的の説明であるか如何かといふ點になると疑問を持たざるを得ないのである。スキー

を穿いてゐては爪立ちせよと言はれても出来る筈はなし、又不必要に過度な前傾で長い滑降を續けるといふ心配も一般にはないのであるから、問題は廻轉の初期並に中期に於て、前傾を強調して行くといふ場合にあるのであつて、此の際の前傾をどう説明するかと言ふ所にあるのである。著者の言ふ様に、爪先體重と足指附根體重の使ひ分け、或ひは踵を浮き上らせずに寧ろ踵にも意識的に力を入れて鋭い前傾を行ふといふ様な説明が、一般練習者に對して適切な説明であるか如何か、理想の極點を説くあまり反對の効果を讀者に與へる様な弊がないかと言ふ事を心配するのである。

基本的技術説明の外に第一部中では滑降中に於けるスピードの調節の重要さ、その爲の減速法加速法、それからスピードとカーブの關係等山スキーにとつて重要な研究が述べられてゐるのであるが、此處では省く。多少どんなものかと思はれるのは、廻轉は自然的な徐々に曲つて行く大カーブを描く事が窮極の目的であり、そしてそののみが高速度廻轉に於ける唯一のもので、鋭いカーブを描く事は誤りである(一八六頁)と斷定してゐる點である。

第一部を通讀して感ずる事は、

説明の冗漫といふ事である。これは著者自身も認めてゐる所ではあるが、重要な故に詳述するといふ事と、くどいといふ事とは自別である。讀者に教へるといふ事を意識して論述の整理が出来てゐたならば、更にその理論が光を増すものと遺憾に堪えない。總じて、基本的説明は或る地形、或る雪質を豫想して述べられるものであるから、それ以外のヴァリエーションは一應除外して別に説明する事として、より簡単な親しみ易い説明が作り得る筈だと私はいつも思ふのである。

第二部は本書として最も主要な部分である。山地に於てぶつかる雪質として著者は左の様に分類する。

新雪		舊雪	
粉雪	主として風の影響に依るもの	硬雪	主として陽光の影響に依るもの
濕雪	融解と凍結の影響を甚しく受けたもの	凍雪	融解と凍結の影響を甚しく受けたもの

そして、その成因から説き進めて、各雪質に於てクリスチャニヤを應用する場合の特別に注意すべき點を詳論してゐるのであるが、茲でも、論述が冗漫の感を與へるのは残念である。雪質變化の原因

を知る事は勿論必要であるが、その爲めにより重要なスキー操作上の説明に遺憾の點を與へてはならない。風のクラスと陽光のクラスト、濕潤新雪と凍雪のゆるんだものは略同様の効果をスキーに與へるものであるから、そういう觀點から論述を綜合再分類したならば、更に優れたものが出来たであらう。クラスの分類その成因の研究を發表するならば、もう少し科學的な纏つたものが欲しかった。此の二つの異つた問題が同時に取上げられた爲に、兩方共徹底せず折角の第二部が低調の感を與へるのは、著者の苦心を相當に割引するものである。

アレも言ふ通りスキー教授に於てはその大部分の時間が、教師と生徒とが一緒に山地を滑走し、實地に指導を與へる事に費さるべきであるが、本書の第二部は之を著書の上で行つたものである。實地指導の講習會でも、此の様な教へ方の稀な我國の現狀に於て、此の分野に分け入つた著者の努力はその成果の如何は別として、高く評價されなければならぬであらう。

著書は本書を書き出して見て、一通りでない困難寧ろ無謀に近い困難さを持つてゐる事を發見し、中止を思つたのであるが、本書に

依つて一つの研究問題を投ずる事が出来るならば、そこに進歩を見出す事が出来るであらうと言ふ意味の下に、思ひ切つて公にしたと述懐してゐるのである。山地に於けるクリスチャニヤの研究には本書の研究題目たる雪質の外に尙地形と荷物といふ事を忘れてはならない。これ等の問題を綜合した研究と言ふものは、全く困難な仕事であらうが、然しこゝにいふ問題が所謂スキー人のみでなく、我々山岳人に依つても取り上げらるべき事を私は重ねて強調し度いのである。本書はその内容のみではなく此の様な狙ひを持つてゐるといふ意味に於て、從來のスキー教科書に比し高くその價值を評價するべきものと思ふのである。

著者とは一面識もないが、北大出身で現在青森林友の指導的位置に居る人と思ふ。巻頭の寫眞も八甲田山を中心とした見事なものであるが欲を言へば、八甲田の大觀を示すもの、廻轉の初期並に中期を撮つたものを加へて欲しかった。又富良野岳の寫眞が一枚丈はさまつてゐるのは調子はづれの感、誤植の多いのは不愉快である。(六藝社 菊版二二頁二四五十錢)

社團法人
改組記念

講演と映畫の會

★六月二十日(金)午後六時

★九段 軍人會館

一、講演「山を省りみる」

會長 木暮理太郎氏

一、講演「山と生活」

會員 柳田國男氏

一、映畫「亞細亞大陸横斷」 八卷

パテ・ナタン社

一、映畫「富士の地質」 二卷

★東京附近の會員諸氏には漏れなく招待券を呈上本會報と同時封御送りします。

★地方會員諸氏で、當日御上京御臨席の諸氏は豫め事務所、又は當日會場受付へ御申出下さい。

★一般入場券 五十錢

會員諸氏の切符御賣り捌きを願ひ上げます。



山の名、山の地名(五)

白馬 耕

甲斐駒ヶ岳 甲斐・信濃界 二
九六五・六米

この岳は木曾駒ヶ岳(西駒)に對して普通「甲斐駒」と呼ばれ、また東駒とも俗稱される(「山日記」)。信州高遠邊での呼稱に、この山を東岳、或はタケ(岳)といふのがある。東岳といふのは仙丈岳を前岳と呼ぶ關係であらう(後述)。又、タケは土地の人々の敬仰する山への敬稱語であるのは云ふ迄もない。一例をあげれば、白根北岳を甲州芦安村でタケといつてゐる。

甲斐駒を信州高遠邊の人々は白崩山と往時呼んでゐた。岳の花崗岩が白く崩れたのに由來する。頂上の宮を白崩神社として祀り信州を表側とした、白崩神社の前宮(黒河内附近)の額に「名にし負ふ駒の

嵐の激しさに白くぞ峯の雪ぞ崩る」とある。尙、甲斐駒の「東岳」に對して木曾駒を西岳とも高遠の人々が呼ぶといふ意味が記してある(山岳二ノ三、梅澤親光氏)。

或は「……黒川の近くに前宮があるも、こゝを社務所として嶽の絶頂に祠を建て、白崩神社と呼んでゐたので嶽の事を白崩とも呼ぶのである(二ノ三、島山、梅澤氏)。尙、白崩神社の祭神は不明と記してある。

梅澤氏等による此の登山は明治四十年當時であるから、地方人の嶽に對する信仰も種々な形で生きてゐた。白衣の先達を案内として歩いたことも面白い。然も之らの記文によつて窺はれるのは、當時においては寧ろ戸臺側の人々は、信州側をこの山の表としやう意氣込みを以て神社を建て然も登山客を吸收しやうとしておつたのが窺はれる。尤もこの當時と雖も、梅澤氏一行が雇つた人夫のうち、白崩の來歴を知つてゐるのは一人であつたといふ。

甲州側には前宮である駒ヶ岳神社が祀つてある。駒ヶ岳といふのは、當時にあつては甲州側の人々の呼名であつたらう。峯を界にして甲信各々その呼稱を別にしておいたのは、人々と山との信仰的關係から見るも意義深い。信越界の白

馬岳がやはり越中と信濃の人々によつてその呼稱を異にしてゐた事實と同じ行き方である。

甲斐駒に隠れた一つの「白崩山」といふ別名のあつたことは、結局戸臺側の人々の慧眼に歸すると思ふが、輝いて崩れるやうな花崗岩砂の山肌を朝夕眺めてゐるうちに自然と心に浮んできたやうな呼び名である。

事實、この山の頂上附近をさまよひ、且つ南に出てゐる尾根を仙水峠方面に向つて下降すると、白崩といふ岩肌の感じを充分にうける。然も、アサヨ峯に登り、もう一度この山の南面に接すると、呼稱發生の實感が油然而湧いてくるのを否めない。

仙丈岳 甲斐・信濃界 三〇三・二七米

この山について明治四十年當時、信州戸臺に住む一老農は次のやうに語つてゐる。「前岳とも御鉢岳とも申すが、仙丈とやらはきかない。十二年ばかり前に二度雨乞に登つた、頂上は御鉢のやうでグルリと廻れる奇麗な大山ですが、岳(筆者註、甲斐駒)と違つて、けちな神様ばかり祀つてある」と。或は「仙丈といふのは地圖に對する便宜上の名でその邊では前岳(白崩山)とか御鉢岳とか云ふて居るので、仙丈とは恐らく甲州の人の

呼ぶ名で、もあらうか」と梅澤氏は記しておられる(山岳二ノ三)。處がその後當山へ登つた河田默氏の記事によつて大意を記すと次の如くなる。「仙丈岳と云ふ名は甲州方面の名であつて信州ではマヘダケ(前岳)又はオガチダケ(小河内岳、宛字)と云つてゐる。本誌二年三號の白崩山に向ふの記に前岳ともオハチダケ(御鉢岳)とも云ふと書いてあつたが、これは小河内岳と云つたのを御鉢岳と間違つたのであらう。何故オガチ岳といふかと云ふに、戸臺の少し下で黒川に入る澤があるが、この澤はオガチ谷と云つてゐる。その谷の出てくる岳をオガチ岳と云ふので、即ち前岳がそれである。如何に宛字を書くかについては、二通りあつて、尾勝と云ふ者と小河内だと主張する者がおつた。尙、この談は戸臺の山案内小倉龜十の弟から主として聴き取つてゐる。

このオガチ谷へは、石灰岩採取の人達が以前入り込んでゐたといふから、此の澤の呼稱は古い譯である。しかも、他の幾つかの例から云つても、澤の名をそれに續く岳に移轉するのは常であるから、小河内岳と呼ばれたことのあるのも容易に推量できる。そこで、御鉢か小河内かであるが、事實仙丈岳の頂上直下は所謂カール狀地形

をなしてゐるから、里人が御鉢岳と呼ばぬとも限らないが、若し事實この呼名があつたとしても、ほんの一部の人々の間に限られてゐたであらう。或は河田氏説の如く、御鉢はオガチ(小河内)の開き誤りだつたかも知れない。

「オガチ」はヲゴウチ、ヲガウチ、ヲガツチなどの同類音であることは云ふ迄もなく、下手から澤の上流を呼んだ語で、即ち山にかまつた澤合ひの土地を指す。この邊の例では多くの場合そこには人家がある。戸臺附近の黒河内もまさしく此のコウチである。仙丈と同系の連嶺に屬する、現在同幅で拾へる荒川岳と鹽見岳の中間に位置する小河内岳も同じで、一つの峯傳ひに、小河内岳といふ呼名が二つもあつたことは當然とは云へ、面白い現象である。このヲは小さいを意味するもので、當時、尾勝とか雄勝といふ文字が宛てられてゐたと云ふが、甚しい宛字の標本に過ぎない。「小河内」では月並だといふので、こんな勇ましい文字が發明されたのであらう。

尙、明治四十二年當時においても、仙丈の頂上、石祠の一つには前嶽三柱大神と記されてゐたといふから、前岳といふ呼稱も、その歴史は古いことが推察できる(山岳四ノ三)。



圖書紹介

山へ開く窓

勝見 勝著・朋文堂刊

詩を作るより田を作る方を尊しとする私と、「山へ開く窓」の著者勝見勝君とは凡そ對蹠的な性格である。

勝見君は優しくて静かなモツアルトを愛し、私は意志的でドラマチックなベクトルを愛する。どつちみち此の二人は全く異つた道を歩む無縁の衆である。

ところが不思議なことには勝見君も私も「美學」と云ふ人生最高の學問を専攻し「登山」と云ふこれまた最高の趣味を同じくしてゐる。性格的には全く無縁の二人にもこんな大きな共通點があつたのは不思議な運命と云はねばなるま

い。さうしたところから相識するうになつて、此の頃處女作「山へ開く窓」を贈られた。

正直なところ、詩を解さない私に此の書の價值が分る譯がない。だからこゝでは推薦や批評をすることは出来ない。ただ愚感を述べるだけにとゞめる。

先づ装幀の繊細なフランス趣味は、ヒトラー・スタイルと云ふ粗野で剛健なものばかり見慣れてゐる私には何となく縁遠い感じである。

中をバラ／＼とめくると素晴らしいスケッチが目についた。中山省三郎氏の作である。殊に中央に挿入されてゐる方は頗る印象的で大いに氣に入つた。

そこで自序から読み出す。此の書の成り立ちが語られてゐる。幸福な人生に恵まれた著者の愛せられるものの惱みが感じられる。それが著者を山へ誘つたものであらう。贅澤と云へば贅澤である。古めかしいと云へば古めかしい。

併し著者はどこまでも正直に此の氣持を歌つてゐる。「南信彷徨」「峠の春」「笠雲」「嚴降の日」、みんな純情な山旅の記録である。私の趣味から云へば、どの文章もタッチが弱く、感傷的で、そして若さからくる街氣がありすぎる。

花袋や牧水や秋田に比べては酷で

あらうが、私は著者の才能を信ずるが故に、さうした作者の文章に比して一段の工夫を望みたい。

尤もこれは恐らく文章の工夫と云ふものではなくして人生の工夫と云ふべきものであらう。

著者の山歩きの態度は甚だ我が意を得てゐる。著者はよく季節を見てゐるからである。季節と云ふものは日本人獨特の自然觀であつて、此の點著者の態度は極めて日本的であると云つてよい。

概して初期の作品がよく、「私の耳は貝の殻」や「あるびにすま・せんちめんたりす」の如き比較的新らしいと思はれるものは街氣が強く饒舌にすぎて私はとらなない。併し「馬鹿尾根の如く」のやうなものには著者の作家的一面が見られて注目値する。

第四篇は書評を集めたもので、一見ただで著者がなか／＼の讀書家であることが判る。

「雜草も春は花咲く山の蔭」とは本書と共に贈られた著者の句であるが、どうして著者は雜草どころではない。見事な花をつける園藝品種である。而かも此の品種は今後大いに發展の見込みがある。

(小池新一)

會員通信

春期合宿

早大山岳部

今春の合宿は、下級部員の積雪期登山の訓練を主眼として行つた。参加者十八名で、その中一、二年生は十名であつた。善六澤にB・Cを建設し、西穂高から天狗のホルヘ、CⅠ、CⅡ、CⅢとテントを張り、CⅢから奥穂高を往復したが、天候悪く豪雨や吹雪に悩まされ、相當長時日を要した。

二十六日 曇 七名CⅠに入り他はこれをサポートす。
二十七日 吹雪 CⅠ雪に埋り生活困難となる。
二十八日 吹雪 CⅠの七名B・Cに下る。
二十九日 吹雪 B・Cに滞在。
三十日 晴 新雪落着かぬ爲、B・Cに滞在。
三十一日 吹雪 B・Cに滞在。
四月一日 吹雪 B・Cに滞在。
二日 晴 CⅠに登り雪に埋つたテントを張り直す。CⅠは七人用と四人用のウィンパー二張り。
三日 晴 二バーティー八名がCⅠに入り他はこれをサポート。
四日 曇後雪 CⅠに居た二バーティーが西穂高第二峰の肩にCⅡ建設。七人用と四人用ウィンパー。CⅠの一バーティーとB・Cから登つた二バーティー合計十名がCⅡに入る。
五日 豪雨 酷い土砂降り。テントの中はびしょ濡れ。
六日 吹雪 滞在。
七日 吹雪 滞在。
八日 晴強風 天狗のホルヘにCⅢ建設。四人用ウィンパーと四人用雪洞を掘る。二バーティー六名が泊り他はCⅡに歸る。
九日 曇後吹雪 奥穂高往復。十二時頃から猛吹雪となる。CⅢ

三月十八日 先發隊六名新宿發。
十九日 晴 トラックで荷を澤渡へ運ぶ。
二十日 晴 荷を二回に分けて中ノ湯へ運び中ノ湯泊。
二十一日 晴後曇 荷を半分五千尺へ運ぶ。本隊十二名新宿發。
二十二日 曇 残りの荷を五千尺へ運び、午後善六澤右岸の臺地、河童橋より千五百米位の所へB・C建設。本隊は中ノ湯に滞在。
二十三日 雨 五千尺及び中ノ湯に滞在。
二十四日 晴 B・Cへ荷上げ、本隊五千尺へ来る。
二十五日 晴 全員B・Cに入り四名はCⅠを西穂高から中尾峠に至る稜線上に建設。

の全員雪洞に寝る。

十日 吹雪 風が稍弱くなつたのでC撤収。CIIに歸る。四名は荷を持ってB・Cに下る。

十一日 吹雪後晴 CII C撤収

十二日 快晴 B・Cでマツト、テントを乾す。

十三日 雨 B・Cを撤収し中ノ湯へ。

十四日 晴 昨日の雨でバスが来ぬので滞在。

十五日 晴 澤渡よりバスで島々へ。

十六日 早朝新宿へ歸る。

白馬梅池へ(四月末)

田邊主計

四月二十六日夜東京をたつて白馬の梅池へ遊びに参りました。

二十七日(晴)朝一〇・三〇、四谷下車。細野に立寄り二俣で晝食、一時過ぎに出發。猿倉へ行く道と分れて、右へ入り橋を渡つて赤倉澤に出て、ほうの水平を経て梅池小屋着七時。

二十八日(晴) 九時に小屋を出て天狗原から木地屋へ滑降。木地屋は四時半近くに着。一時間程いつも寄る家で休み、平岩から街道を蒲原温泉へ行きました。八時に着。

二十九日(午前中曇)

八時半温泉をたつて中土發一・四五分の汽車に乗り夜九時前に新宿へ戻りました。

附記——四月末に何處かスキイに行く良い所はないでせうかと尋ねられたので、私はこの梅池から木地屋へ出るミチをすゝめたのであつた。そして細野の山案内人を紹介しませうなどと言つてゐるうちに私も行くことになつた。それに戦争から歸つて來た友人の歡迎會を、私はどこかの山で催したいとかね／＼言つてゐたのでその友人も誘つた。多くの人がたがさうであるやうに、彼も歸還後山歩きなんか出来るかどうかとその體力を疑つてゐたのであつたが、荷も軽くし行程も樂にするからと言つて誘ひ出したのであつた。それでこの二日休んで五日になる機會を利用する私自身の計畫を斷念してもよい事になつた。

以前會報にも書いたやうにこのミチは少しスキイをやつてからボツ／＼山歩きを始めやうとする人には適當なものである。但むづかしい箇所はないが、天候に注意を拂ひ、山案内人同行を頼むことにしたい。この平易に思はれるみちに於て天候の變化等により生命を失つた人も数人ある。梅池へは普通は森上で降りて落倉のスキイ小屋を経て行くが、私は二俣の方からは行つた事がなかつたので、都合がよかつたら今度はそちらから行きたいと思つた。前者が山麓の單調な登りを續けるのに對し、この方は變化に富み又白馬から八方尾根や五龍の方までの眺めが美しい。但南側の山面であるから雪も早く無くなる。我々も隨分上の方までスキイを擔ぎ上げたので、その日の四時近くになつて、やつとはいいたのであつた。梅池からの歸路も神ノ田圃からまつ直ぐに降りるのはあつけないが、雪の多い時ならばこの方から尾根づたひに岩藪山へ出るミチをとればすつと多く樂しめる事と思ふ。木地屋へ降りるミチも大抵の人々を喜ばせる。大池の横からウド川へ入る所も樂しく、この邊からの朝日岳方面の眺めも美しい。雪のあ

る時は大所から峠を越して小瀧へ出て夜汽車に乗つたが、木地屋からは雪もなかつたし、又今度蒲原温泉へ泊ることになつたのでそちらへ行つた。暗くなつて温泉に着き、まづ湯に入つてから、ビールを飲み食事を樂しんだ。簡單な山歩きでも皆が無事に氣味よく戻つて來る所に最大のよろこびがある。今度もこのミチをはじめて通つた人々を大そうよろこばすことが出來たので私もすゝめた甲斐があつたのであつた。大町の近

くへ來て或る停車場からドヤ／＼乗りこんで來た若い男女の團體があつたが、天長節にどこかへ遊びに行つた人々らしいが男の中には白晝から酒氣を帯び、女につまらぬ事を言つたり窓外の人々に向つて叫聲をあげたりしてゐるものがあり、大町へ着くと同僚に兩腕をとられて引きづられて行くものや、ゲー／＼／＼／＼を吐いたりしてゐるものもあつた。松本行の電車に乗つて來られてはたまらぬと思つてゐたら大町で降りて行つたが、最初職工や女工ではないかと思つたが、今は「産業戰士」といわれてゐるのであるからそんな筈はないし、どういふ人たちであらうかと考へた。いづれにしろ、あのやうな若い人たちが何の聲響も受けず野ばなしにされたやうになつてゐるのは恐しいやうである。いつも山から降りて都會の方へ來ると、いくつかの心を暗くする事柄に出會ふ。(勿論ふだんでも心を暗くする事柄は田舎にも都會にも多いのであるが)それが以前よりも近頃の方が増えてゐる。

◆事務所便り◆

◆昨年來病臥中の名譽會員小島鳥水氏をお見舞しました處、絶體面會謝絶にも拘らず特に呼び入れら

れ、日本山岳會の諸君によりしく傳へよ、又山岳會の事は後を頼むとの御言葉で、氏の本會を思はれる熱情に感涙を催す程でした。本會はかうした會員の強い愛會心によつて益々力強い活動に入る事が出來るのだと力づけられます。尙小島氏は近頃又少しお悪いやうですが、まだ／＼年もお若いのですし早く病氣を克服せられて、再び元氣なお顔をお見せ下さる事を全會員で祈りたいと思ひます。

◆近頃地方會員の來室者が多くなつた。地方在住の方は平常は會との直接交渉が少ないのであるから上京の折には必ず事務所立寄られ其地の状況をお聞かせ願ひたいものである。かくして會と會員との關係は益々密接なものとなつて行くであらう。

◆貴會益々御隆昌の段賀上候といつたやうな手紙が折々會員から來る。その度毎に私は何だか變な氣がする。會員が自分の會へ手紙を出すのにどうして貴會と書けるのだらうか、まさか旅先から自分の家へ出す便りに、貴會益々と書く人はあるまい。自分の會であるといふ考を全會員に持つていたゞきたいと思ふ。

★

(塚本生)



會員の聲

豫てより實は思つて居つたのですが、私は會報四月號掲載の北上氏の言に共鳴します。短刀直入に申せば「山岳」は詰らぬ。何か山岳學？のまるで學位論文でも讀む様な氣がします。私の如き休日少い、東京附近の山々にしか親しむ事の出来ない者にとつては、實際自分が行ける様な山々の記事でも有れば讀みますが、到底一生の内でも絶対に行けそうもない山に對する記事などまあお伽話でも聽いてゐるやうです。小生の友人で矢張り會員の者が二、三ありますが、殆ど見ずに古本屋へ賣つてしまふ人もあります。尤も小刀でも持つてないと次頁を繰るのに手數が掛るのでその煩しさも手傳ふのでせう。何にしても今少し親しみ易い記事、ポピュラーな記事、隨筆、論文結構です。勿論「山岳」は巷間のハイキング山岳雜誌などに

と類を異にするのは當然です。

それから有志晚餐會なるものに就いて殆ど出席される人の顔觸れが決まつてゐる様ですが、もつと新人、若者が何の氣兼ねせず氣輕に出られる様に世話人一同の方々に希望します。兎角日本山岳會の方々は大家が多いせいか私等のやうな青二才にはどうも近寄り難く感じます。會報へ最近未知の人が書かれる様になつたことは嬉しい限りです。從來殆ど決つてをつた様ですが、最近では新味を感じる様になりました。

山岳圖書の閲覧も事務所が私にとつては一寸不便なせいか、利用致したいと存じ乍ら出來ずに残念です。出來れば貸出の方法も御考慮ひたく存じます。圖書閲覧利用者が極く一部の人に限られてゐる事は残念です。暴言多謝

(谷本弘)

★ 日本山岳會の皆様様の常々の御奮闘に對しては心から敬意を表する者ではありますが、多事多難な今日もう一段と御努力頂き度いと存するものであります。

遭難は天の吾々に與へる試験だとするならば、一度生じたアクシデントに就いては會報等の紙面を

惜しまずに、冷靜嚴格な飽くまで原因を追究する態度でその批判をすることが、吾が山岳界をリードされてゐる貴會の任務と思考致すのであります。勿論詳細な資料の手に入らぬ場合は別問題として。例へば二月にマチガ澤で生じた海野氏をリーダーとせる雪洞の遭難の如き、吾々登山せる者は誰でも疑問を抱くやうな登山方法による遭難は、個人的個別的攻撃を全く別にして廣く一般的になされる批判は是非とも必要だと思ふのであります。

海野氏の如き方は著書もあり一般に影響すること多いと考へられます。それで然も優秀なアルビニストと一般の者は考へて居る海野氏が、あの様な時にあの様な場所を登られた事が既に間違つてをり雪洞技術に致つては甚だ拙劣と思はれます。

つまらない世の中の義理、人情などにひつかゝらず、斯様な時に活潑な論議は是非必要だと思はれます。會報をいくら讀んでも斯様なことが載つてゐないので、とうとうたまりかねて一筆したゝめた次第です。

大方諸賢の御考慮を煩はしたく右御願ひ申し上げます。甚だ亂筆失禮なことを申し上げます。

(一會員)



會務報告

關西會員大會

昭和十六年四月十八日(金)

於中央公會堂小集會室

本會の社團法人認可其他に關する報告並に關西支部の今後の事業對日本山岳聯盟、對關西學生山岳聯盟及先輩クラブ問題其他に就き關西在住會員の忌憚なき意見を聴取し今後の方針を決定せんがために關西會員臨時大會を開催した。先づ湯淺幹事より社團法人認可後の會務を報告し、次いで前田幹事より新組織による關西側役員を紹介し、左記の通り幹事會に於て決定を見た委員を推選し今後會のために御盡力を願つた。終つて愈々本論に入り、關西支部の今後の事業に就いて幹事會に於て審議した事項を前田幹事より説明し、參集者全部より同意なき意見及希望を聴取した。對日本山岳聯盟、對學生聯盟、山岳・會報に對する意見を初め、山岳會が積極的に研究的實踐方面に進展する必要性を強調

する意見が大多數を占め熱ある論議が繰返された。某氏が強調された本會の性格を從來より一變して欲しいといふ意見は充分考慮すべき言であつた。

とまれ本大會はあらゆる點で有意義な會合であつて、當夜の討議を實行に移すために緊急役員會を開き、充分研究の上、本部との密接なる聯絡のもとに山岳會のために努力する事を申合せ盛會裡に散會した。

(委員) 西岡一雄、栗飯原健三、山中正之助、小川正十郎、富田健一、入江保太、中村勝郎、

(出席者) 今西壽雄、前田光雄、木藤清一郎、直木重一郎、伊藤幸一、藤木九三、津田周二、栗飯原健三、青木竹三郎、湯淺巖淺井東一、吉岡武治郎、山口季次郎、小川正十郎、入江保太、西岡一雄、長岡榮作、

會員外六名
有志晚餐會
昭和十六年五月三日
芝田町、つかさ

出席者 飯塚篤之助、大熊保夫、栗原和輔、佐藤隆太郎、進藤波男、田邊主計、藤野國夫、福田嘉四郎、藤島敏男、神谷恭、島山梯成、中野米年、中村徳郎、塚本繁松、横山直介、土屋銀雄、角田吉夫、村尾金二、計十八名

昨年四月世話人を仰せつかつて、秋にでもなつたら開かうと思つてゐた晩餐會が、秋から暮へかけて山岳聯盟の問題が起つて延び延びになり、年が改まると社團法人設立となつて何かと御多忙の人も多く、彼はその中もう五月の聲を聞く様になつた。

場所も玉川の方でも出かけたらか、リュックサックをかついて行つたらとか、あゝでもない、こゝうでもないとか色々考へたが、結局下手の考へ休むに似たりで、お馴染の「つかさ」に落着いてしまつた。こんな工合で集りはどうかと心配してゐたが新しい顔觸れの方も相當見えて賑やかだつたのは有難かつた。唯御出席の御通知を頂いた長老高頭氏がお見えにならなかつたのは、餘程特別の御事情のおありの事と思はれたが、心待ちにしてゐた丈けに淋しかつた。

會場には「高山深谷」應募寫眞七百餘枚の中から選り抜いた二十數葉の優秀作品が飾られて、爽涼な高山深谷気分が堂に満つた。

六時過ぎ開會の辭から始まつて、名に負ふ「つかさ」の珍味佳肴と芳醇な酒に、山の話から世相の話まで話がはづんで、盡きること知らない歡談劇。初めは喧しいと思つた前を通る市電の音も、後を走る省線の響も一向耳に

入らない。やがて今回の世話人を神谷恭、土屋鎮雄兩氏に頼みひし、分るゝには惜しい初夏の宵を散會したのが九時。

(世話人、角田、村尾)

五月役員總會報告

五月六日(火)午後六時半 於虎ノ門事務所

出席者 木暮、島山、茨木、西堀、加藤、藤島、沼井、額田、三田、青木、村尾、早川、中司、横山、塚本、望月、委任十八名

(議長 木暮會長)

一、定款細則作成の件
イ、支部規定
ロ、會員總會に關する細則
ハ、處務規程

右諸規定の草案讀會。何れも字句に幾分修正を要するものあり次回に再審議の上完成の事とす

一、會員總會事務分擔の件
當日の議事擔當者左の通り決定

議長 木暮會長
本會の現狀報告 木暮會長
昭和十五年度收支決算報告 昭和十六年度豫算附議 島山理事

本年度新事業計畫 塚本幹事
一、登山年譜編輯委員其他委嘱の件

登山年譜編輯委員の件は會員總會後適當の日を選び委員會を開

き協議すること。委員會の構成は木暮會長に一任す。

中司評議員に會計擔當を委嘱す

一、新事業報告の件
六月末の講演會は、期日六月二十日夜、場所軍人會館に決定。

講演者 柳田國男氏(交渉中)
木暮會長

映畫 シトロエン大陸橫斷旅行(會員袋一平氏を介し交渉中)
國際觀光局所有映畫一、二卷(會員織内信彦氏を介し交渉中)

一、山岳寫眞展覽會
七月上旬頃開催のこととす。

一、入會申込者左の通り承認決定
村井正衛、石原博和、吉井楢雄、竹本省三、川崎隆章、神久策、豊田種英、内山均、服部輝二

會總會々講演會
昭和十六年度通常總會は五月十五日午後六時半より塚本幹事司會の下に赤坂三會堂にて次の次第により開催せり。

議長 木暮會長
一、本會の現狀に就て 木暮理事
本會創立以來本年は三十七年目に當る事。本會には會長を置かね事を原則として來たが、時勢の變化と共に數年前より會長を置くに到つたが、それは絕對に戴くのではなく飽迄置くのである事を力説。現在の會の財産は約一萬八千圓である事。會員數

は現在九三三名であり、昨年來百名以上増加してゐる事。退會死亡等で、減少した會員數は昨年一月以來二〇名である事。圖書室への來室者はこの三四の二ヶ月間を昨年度同期と比較すると約三倍に達してゐる事。會費納入狀況も稍良好にて既に本年度會費の納入者は五割五分に達してゐるが、九割五分に達し居る程度でなければ成績良しと言ひ難い事等々發展しつゝある本會の現況について熱意ある説明ありたり。

一、舊日本山岳會昭和十六年一二月收支決算及び法人改組後の昭和十五年度(昭和十六年三月一ヶ月)收支決算報告 島山理事

右は満場一致にて可決。
一、昭和十六年度豫算(別掲)附議 島山理事

右の豫算案を説明し承認を求め。尙本年度は法人改組後日淺く新事業も遂次計畫され居るを以てそれに從つて豫算は幾分の變更を要するかも知れずその都度役員會は善處するを以て了承されたき旨要請

右は満場一致可決。

一、新事業計畫 塚本幹事

右に就て五月號會報發表同様の事業計畫について説明、役員一同熱意を以て完遂を期し居る旨

を強調、全會員の支持を懇請す。以上

總會出席者
關根吉郎、山崎安治、佐野和男、塚本繁松、藤島敏男、望月達夫、木暮理太郎、木村鐵吉、横有恒、藤岡健藏、島山棉成、酒井忠一、織内信彦、神谷恭、沼井鐵太郎、早川義郎、茨木猪之吉、野口末延、松野節夫、諸岡一次、小野幸、吉田竹志、藤野開夫、石原博和、太田敬、玉木六郎、岩崎京二郎、杉本義信、鈴木正俊、田邊主計、小原勝郎、豊田種英、内山均、學習院山岳部西崎一郎、小林清孝、櫻井信雄、笠原茂雄、岩永信雄、伊藤久行、法政大學山岳部、東京高松山岳部、東京慈惠會醫科大學山岳部、青山學院山岳部、慶應義塾山岳部、府立高松山岳部、東京農大山岳部、委任出席八十七名

外に講演會出席者會員外三十名

講演會
會員總會終了後今冬の早大山岳部冠帽峰遠征につき左記の講演があつた。

冠帽峰概観……關根吉郎
裝備について……山崎安治
食糧について……佐野和男
關根氏は周到なる準備を以て冠帽峰の地理的概観並びに積雪期の登山史を物語られ、更に今回の北

を強調、全會員の支持を懇請す。以上

總會出席者
關根吉郎、山崎安治、佐野和男、塚本繁松、藤島敏男、望月達夫、木暮理太郎、木村鐵吉、横有恒、藤岡健藏、島山棉成、酒井忠一、織内信彦、神谷恭、沼井鐵太郎、早川義郎、茨木猪之吉、野口末延、松野節夫、諸岡一次、小野幸、吉田竹志、藤野開夫、石原博和、太田敬、玉木六郎、岩崎京二郎、杉本義信、鈴木正俊、田邊主計、小原勝郎、豊田種英、内山均、學習院山岳部西崎一郎、小林清孝、櫻井信雄、笠原茂雄、岩永信雄、伊藤久行、法政大學山岳部、東京高松山岳部、東京慈惠會醫科大學山岳部、青山學院山岳部、慶應義塾山岳部、府立高松山岳部、東京農大山岳部、委任出席八十七名

外に講演會出席者會員外三十名

講演會
會員總會終了後今冬の早大山岳部冠帽峰遠征につき左記の講演があつた。

冠帽峰概観……關根吉郎
裝備について……山崎安治
食糧について……佐野和男
關根氏は周到なる準備を以て冠帽峰の地理的概観並びに積雪期の登山史を物語られ、更に今回の北

を強調、全會員の支持を懇請す。以上

總會出席者
關根吉郎、山崎安治、佐野和男、塚本繁松、藤島敏男、望月達夫、木暮理太郎、木村鐵吉、横有恒、藤岡健藏、島山棉成、酒井忠一、織内信彦、神谷恭、沼井鐵太郎、早川義郎、茨木猪之吉、野口末延、松野節夫、諸岡一次、小野幸、吉田竹志、藤野開夫、石原博和、太田敬、玉木六郎、岩崎京二郎、杉本義信、鈴木正俊、田邊主計、小原勝郎、豊田種英、内山均、學習院山岳部西崎一郎、小林清孝、櫻井信雄、笠原茂雄、岩永信雄、伊藤久行、法政大學山岳部、東京高松山岳部、東京慈惠會醫科大學山岳部、青山學院山岳部、慶應義塾山岳部、府立高松山岳部、東京農大山岳部、委任出席八十七名

外に講演會出席者會員外三十名

講演會
會員總會終了後今冬の早大山岳部冠帽峰遠征につき左記の講演があつた。

冠帽峰概観……關根吉郎
裝備について……山崎安治
食糧について……佐野和男
關根氏は周到なる準備を以て冠帽峰の地理的概観並びに積雪期の登山史を物語られ、更に今回の北

を強調、全會員の支持を懇請す。以上

總會出席者
關根吉郎、山崎安治、佐野和男、塚本繁松、藤島敏男、望月達夫、木暮理太郎、木村鐵吉、横有恒、藤岡健藏、島山棉成、酒井忠一、織内信彦、神谷恭、沼井鐵太郎、早川義郎、茨木猪之吉、野口末延、松野節夫、諸岡一次、小野幸、吉田竹志、藤野開夫、石原博和、太田敬、玉木六郎、岩崎京二郎、杉本義信、鈴木正俊、田邊主計、小原勝郎、豊田種英、内山均、學習院山岳部西崎一郎、小林清孝、櫻井信雄、笠原茂雄、岩永信雄、伊藤久行、法政大學山岳部、東京高松山岳部、東京慈惠會醫科大學山岳部、青山學院山岳部、慶應義塾山岳部、府立高松山岳部、東京農大山岳部、委任出席八十七名

外に講演會出席者會員外三十名

方よりの登攀に及び寔に興味深く話され、次に山崎、佐野の兩氏は裝備、食糧につき夫々要點を示された。殊に今回早大隊が使用した天幕を會場の一隅に張られ、マツト、オーヴァージューズ、手袋その他實際に使用した裝備品を目の邊り示されたことは甚だ有意義であつた。早大山岳部諸氏の勞を多とし感謝を表したいと思ふ。

會名變更

青山學院専門部報國團山岳部

受贈圖書

- 一、新しきスキーの山旅(山と溪谷社發行)
- 右 編者 川崎隆章氏
- 一、臺灣地質寫真集一―一二(臺灣地學談話會編輯)
- 右 沼井鐵太郎氏
- 一、山・溪・高原(福田源一郎編)
- 右 發行所二見書房
- 一、赤石登山案内(信濃教育會下伊那郡部會編)
- 右 吉田禮二氏
- 一、九重山(筑紫山岳會編)
- 右 筑紫山岳會

受贈會報部報雜誌

- 山梨縣景勝地協會 甲山映水銀嶺會 會報創刊號
- 東京地學協會 地學雜誌四月
- 山と溪谷社 山と溪谷六七號
- 日本山岳寫真研究會 會報四一號
- 熊本アルカウ會 會報四月號
- 明峯山岳會 M M C 十一年五號
- 聖山岳會 聖三號
- 泉州山岳會 葛城四月號
- 關東山岳會 會報四月號
- 關東旅行俱樂部 旅路五月號
- 東京アルカウ會 アルカウ五月號
- 東京野歩路會 山嶺五月號
- 沖電氣山岳部 部報六一號
- 津峠の會 峠五月號
- 日本厚生協會 厚生日本五月號
- 晴山やまの會 晴會創刊號
- 東京山ノ會 會報五月號
- 日本アルカウ會 アルカウ趣味五月
- 大阪ミテコー會 山岳趣味五月
- 白樺山岳會 白樺二年三號
- 橫濱山岳會 會報五月號
- 東京實屋山岳部 部報五月號
- 東京登歩溪流會 會報五月號
- 鵬翔山岳會 會報二六號
- 朋文堂 山小屋五月號
- 大阪探險俱樂部 白峰五月號
- 東京帝大スキー山岳部 報告一九三二年
- 東京農業大學山岳部 報告一九三七年

昭和16年度収支予算

歳入の部

入會金	1,000.00
入會費	5,700.00
雜收入	1,400.00
圖書印稅	1,050.00
印刷物賣却代	100.00
廣告料利子	100.00
其他ノ雜收入	150.00
繰越金	2,373.00
歳入合計	10,473.00

歳出の部

事業費	6,792.00
山岳印刷費	2,000.00
同原稿謝禮	150.00
會報印刷費	1,440.00
會員名簿費	200.00
集會講演會費	400.00
研究調查費	300.00
山岳會報發送費	660.00
通信費	250.00
事業豫備費	1,392.00
事務費	3,681.00
俸給料	1,120.00
借室電話費	840.00
電耗品費	100.00
雜費	450.00
關西支部費	321.00
歳出合計	850.00
	10,473.00

武蔵山岳會 登山五月號
 東京市山岳部 部報五月號
 關東山岳會 會報五月號
 東鐵やまをこの會 會報五月
 國立公園協會 國立公園三、四月
 號
 雁ハイキンググループ 雁四月號
 臺灣山岳會 臺灣山岳報五月
 福岡山の會 せふり三月
 登山とスキー社 登山とスキー五
 月
 日本旅行協會 ツーリスト五月
 築地山岳會 堆石三卷五號
 昭和山岳會 會報五月
 山聲會 三角點十二號
 京都山岳會 京都山岳五・六月

東京野蛭會 のびる創刊號
 安田山岳部 部報五月
 大日本山林會 山林五月號
 The Mountaineer, April, 1941 and
 Prospectus Section.
 Sierra Club Bulletin, February,
 1941.
 Die Alpen, April 1941.
 Trail and Timberline, April 1941,
 Natural History April 1941,
 The Mountaineer May 1941.

あとがき

社團法人改組以來會務も非常に
 多忙であり、従つて會報も中々記
 事多く、月半には會員諸氏の御手

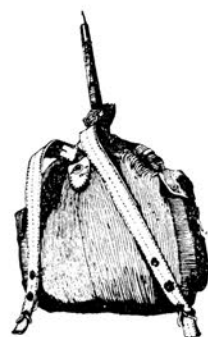
許に御届けしたいと思ひつゝ、つ
 いておくれをりました。が今月
 は猛烈な馬力をかけて幾分取戻し
 ました。例によつて皆様の、殊に
 新らしい會員諸氏の御寄稿を期待
 いたします。(望月記)

昭和十六年六月十五日 印刷納本
 昭和十六年六月二十日 發行

頒價 二〇錢

編輯者 日本山岳會内
 發行所 塚本繁松
 東京市芝區琴平町一丁目二番地
 電話芝(四三)一六四九
 振替東京四八二九
 印刷所 植田庄助
 成文堂印刷所

製布水防麻



キスリング型(E式)

ルックサック

★品質優秀責任保證★

布地見本進呈

特大	二尺二寸	二七・五〇
大型	二尺	二五・三〇
中型	一尺八寸	二三・一〇
小型	一尺六寸五	二〇・九〇

◆ハイキング用肩掛バッグ 三・七〇

◆門田製シュタイクアイゼン在庫品豊富

(公定價格九・五〇)

◆テルモス各種・ハイキング用品

東京市神田區神保町三ノ一(専修大學電停前)

片桐テント登山具店

電話九段(33)三二一〇番
 振替口座東京九一一八四番

山と溪谷

第六十八號夏山特輯完成・堂々A5版二百頁の大冊

(一部七〇錢送九錢・年鑑六部送共四圓十錢)

利根の山川(下)(木暮理太郎)山の寫眞(永田一修)山小屋雜感(加藤誠平)火を焚く術・小屋を作る術(永田一修)加奈陀新山岳地帯航空記録(東良三)東北の山(安齋徹)丹澤水無川遭難救助報告(吉岡恒夫)雄阿寒岳(河田植)カラコルム一九三九年(吉澤一郎)近畿の山(山田奈良雄)はひまつ波(三澤鐵太郎)名案人物語(町田立穂)高山植物隨想(小島浩)越中五ヶ山の熊取り(金子總平)八甲田に新ルートを探る(長谷川末夫)美ヶ原と三城牧場(渡邊仁)野獸奇談(井深勉)北アルプス案内人夫のみの座談會(本社司會)夏山と夜鳥の鳴聲(中村幸雄)尾瀨景鶴山の山名(山崎精雄)夏季登山案内五案(編輯部)山岳傳書鳩講座(水戸高校山岳部)大水上山から中ノ嶽・駒へ(中村謙)大荒川谷溯行記(坂本朱)仙ノ倉谷の奥(永井靖・吉成集男)南會津朝日嶽紀行(川崎隆章)利根源流の谷々(石倉豐)山岳映畫の頁・ヒュッテ巡り・ろばた・新刊紹介・山岳知識・岳人往來・日本山岳聯盟の動向・指導標・山岳辭典其他滿載

塚本閑治山岳寫眞選集第一輯

日本の山々

規格B5版・總ア・ト刷・定價五圓(送料廿二錢)本邦山岳映畫の世界的權威を誇る塚本閑治山岳寫眞の全貌遂に完成、精銳網目寫眞版參百數十個略圖解説入りによる山岳界空前の豪華版

(巻頭寫眞・五席刷原色版)

岩稜に咲く花(北鎌尾根より笠ヶ嶽を望む)

(春)①中央アルプス空木岳②後立山五龍岳(八方尾根・遠見尾根・安曇野)

(夏)③北アルプス北鎌尾根(高瀬川入り)④南アルプス赤石、荒川、鹽見⑤秩父眞ノ澤から甲武信岳

(秋)⑥南會津田代山⑦北アルプス餓鬼岳⑧丹澤水無川溯行鍋割山

(冬)⑨草津から上信國境スキーツーア⑩八甲田スキー行⑪米雪の殿堂雲龍溪谷の溯行

山溪選書第六篇 尾瀨と日光
武田久吉編
規格B6判・塚本閑治裝幀特製・定價貳圓參拾錢
(送料十四錢)

尾瀨と日光

本書は岳人の庭園立公園尾瀨と日光の總體的な研究にして、斯界の第一人者を一堂に會せしめたる絕對權威版にして永く後世に燦然の光芒を輝すものである、口繪寫眞廿一點、挿入並に別刷圖版十數點

(概論) 奥日光 概説 日本山岳會々員 川崎隆章

(地形) 日光・尾瀨・南會津の地形 山形高校地質學部教授 安齋徹

(地質) 奥日光の地質 東京帝大農學部助教授 大塚昌彌

(植物) 尾瀨地方の植物 北海道帝大農學部助教授 館脇操

(科學) 尾瀨の科學 沼田中學校々長 安達成之

(傳説) 南會津に於ける高倉宮御舊蹟 日本山岳會々員 柳田國男

(考證) 尾瀨の昔と今 日本山岳會々員 木暮理太郎

(土俗) 尾瀨地方の土俗雜記 南會津研究家 金子總平

(文學) 尾瀨の四季 長藏小屋主人 平野長英

(案内) 尾瀨日光登山案内 日光研究家 矢島市郎

(研究) 日光開山と勝道上人其他 日本山岳會名譽會員 武田久吉

理學博士 日本山岳會名譽會員 武田久吉

東京市芝區田村町六ノ四
電話(芝)五四三番
振替(東京)六〇二四九番

山と溪谷社

部報「リュック

サック」殘部

◇4號(大正十四年) 二〇六頁——五拾錢

—北鎌尾根—針の木—穗高—劍

など

◇5號(昭和二年) 一七六頁——五拾錢

—針の木生活—上高地—槍—仙

丈岳—など

部報「リュック

サック」殘部

◇4號(大正十四年) 二〇六頁——五拾錢

—北鎌尾根—針の木—穗高—劍

など

◇5號(昭和二年) 一七六頁——五拾錢

—針の木生活—上高地—槍—仙

丈岳—など

◇關東學生登山聯盟報告第三號

(昭和六年)一三二頁——五拾錢

—穗高岳の研究—谷川岳の研究

—など

◇7號(昭和九年) 四〇五頁——貳圓

—澗谷—神の田圃—その他

◇8號の1及2(昭和十四年) 五三頁——五拾錢

—部内報—岳川・明神・白馬生活

—ヒマラヤ研究—など

◇9號(昭和十五年) 八〇頁——壹圓五拾錢

—明神岳—各期合宿—ヒマラヤ

研究—など

殘部數は各々ごく僅かであり

ます。

今回整理のため特に右の價で

お頒けします。

送料は冊數にかへはらず一口

金二十錢頂きます。

送金は郵便爲替又は振替に願

ひます。

東京市淀橋區

早稻田大學體育會山岳部

(振替東京七四一四六番)